

# 日本語学会 80年の歩み

2018

日本語学会

## 目次

言語学会創立 80 周年に向けて 挨拶 田窪行則.....	1
Toward a Symbiotic Relationship between Theoretical Linguistics and Psycholinguistics Masataka Yano .....	4
大海の一滴 内藤真帆.....	6
日本契丹学小史 大竹昌巳.....	9
日本言語学会と私 長屋尚典.....	12
日本言語学会の活動に携わって 梅谷博之.....	15
日本言語学会と傍流会員の 16 年の歩み 木山幸子.....	17
日本言語学会よ、永遠なれ 三村竜之.....	20
言語学会と私 平田未季.....	23
日本言語学会と私の言語研究 山田洋平.....	26
語用論的文法研究の原点 —Charles J. Fillmore の研究— 澤田淳 .....	28
日本言語学会（1988～2018）略年譜.....	31

## 言語学会創立 80 周年に向けて 挨拶

言語学会会長 田窪 行則

2018 年 4 月からはからずも言語学会の会長を仰せつかった。言語学会 80 周年の歴史や沿革については別に原稿や年表が準備されると思うので、そちらに譲り、この挨拶では私と言語学との関係を思い出話風に述べながら、学生当時から今に至る日本の言語学界の雰囲気を取り返し、言語学研究および、言語学会の変遷を述べていく。同時に将来の言語学研究のあるべき姿にも触れる。

私は 1971 年に京都大学言語学講座に配属されて、西田龍雄教授の「言語学概論」を受けた。この授業は非常に緻密に音素論、音韻論、形態論をアメリカ構造主義に基づいて概説したものである。すでに 1958 年に *Syntactic Structures*, 1965 年に *Aspects of the theory of syntax* は出ており、チョムスキーは 1966 年に東京言語研究所の招きで来日していたが、当時は生成文法の授業が博士課程のある言語学講座で行われることはほとんどなかったといってよい。例外は東京大学における藤村靖氏の授業であろうか。原田信一氏が『言語研究』60 号に *Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese* を書いたのは 1971 年だし、この前後から日本でも言語理論は構造主義的なアプローチから生成文法的なアプローチへとシフトしていく。『言語研究』にも生成文法や生成音韻論の論文が掲載され、発表でもそのような発表がすこしずつ増えていく。しかし、言語学講座自体がいくつかの国立大学にしかなく、英、独、仏、中国などの大言語以外の個別言語の研究や文献言語の研究・授業が行われている印象であった。生成文法や論理意味論をはじめとする理論的な研究はアメリカやヨーロッパで行われており、留学してそれらを現地で研究した研究者が日本で得られるのは言語学のポストではなく、英文科であったり、英語の教師のポストであったりした。言語学会ではあまり理論関係の発表はできないと考えられていた。

このためであろうか、このころから言語学会に不満を持つ研究者がさまざまな言語関係の学会を作る。例えば関西言語学会はおもに文献言語学、フィールド言語学といった「伝統的な」言語学の発表の場と考えられていた言語学会に対し、生成文法、語用論、意味論、類型論といった現代言語学的、理論言語学的な発表ができる場として作られた。初期の関西言語学会ではフィールドワーク、歴史言語学、文献言語学的な発表が行われることはなかったし、現在でもそれほど多くはない。また、語用論学会、認知言語学会等の学会も言語学会では十分に活動できないと感じた研究者が作ったと考えられる。学

会組織ではないが ICU で行われていた DAL(descriptive and applied linguistics)もそのような役割を果たしていた。

1990 年代に入ると言語学講座に理論言語学の研究者が入るようになる。私自身 1991 年に九州大学の言語学講座に助教授として入り、海外の著名な理論言語学者を集中講義で招いて、講義をしてもらったし、MIT で博士を取った研究者が国立大の言語学講座に教員として入ったりした。また、それにつれて言語学会でも理論的な発表や論文が急激に増えてくる。私は 2000 年に『言語研究』の編集委員長に選出されるが、任期 3 年間の締めくくり最終号は郡司隆男、齋藤衛という日本を代表する理論言語学者二人に編集に加わっていただいた生成文法の特集号となっている。同様に言語学会の方でも認知言語学、語用論などさまざまな立場の発表がされるようになる。

さらにこの傾向に拍車をかけたのは、言語学会夏期講座である。言語学会夏期講座はアメリカ言語学会 (LSA) が主催する夏期講座に参加した日本の研究者が、ぜひ日本でも同様の試みを行いたというので始めたものである。私が最初に学生として参加したのは 1977 年のハワイ大の夏期講座であった。シカゴ大のジェイムス・マコーリー教授の生成意味論の授業、UC バークリーのチャールズ・フィルモア教授の語彙意味論の授業、ソウル大の李基文教授の韓国語史の授業、ハワイ大のソン・ホミン教授の韓国語文法の授業を受け、それ以外にもいくつか受講していたのだが、各授業でやる宿題をやっていると睡眠時間が無くなってきてしまったため、単位を取る授業は二つだけにして、あとは聴講にしてもらった。それでも授業には出続けたので、睡眠時間は 3 時間ぐらいしかなかったが、ただひたすら勉強して、週末は仲良くなった連中と遊びに行ったり、マコーリーさんたちとピクニックしたり、人生であれほど楽しい時間はなかった。

それ以後も何回かアメリカ言語学会の夏期講座には参加して、いつかこのような機会を日本言語学会でももてるようにと思っていたが、同じことを思っていた何人かの先生方、とくに最初の実行委員長を務められた西光義弘氏の努力下、1999 年柴谷方良会長の時に最初の日本言語学会夏期講座を持つことができた。私自身も最初の何年かは実行委員として参加した。

2001 年には言語学会の派遣で講師として LSA の夏期講座に出席し、その運営についてもいくらか見ることができた。アメリカの大学の言語学科は、大きなところでは 20 人近くの教授陣がいて、多くの範囲の研究をカバーできるが、日本の大学では言語学の講座は 2, 3 人、一番多いところで 4, 5 人程度である。一つの大学には場合によっては 20 人前後の言語学研究者がいるはずであるから一か所に集めて言語学科を作ればアメリカとそう変わらない規模の学科ができるはずなのであるが、さまざまな理由からそうできないでいる。そのために、一つの大学で開講できる授業は分野が偏り、学生の希望

に応じられないでいるのが現状である。夏期講座では理論言語学の講義だけでなく比較言語学やフィールド言語学など普段自分の大学で聞けない授業が開講されており、これまで受講者の満足度は非常に高い。しかし、LSA 夏期講座に比べれば、その規模は10分の1程度であるし、単位認定もかなわない。LSA 夏期講座は開催大学の全面的な協力が得られ、開催期間中はその大学の学生として扱われ、図書館や様々な設備が使える。これは、アメリカの大学が基本的に9カ月制で、夏期の3カ月はサマースクールとして別の会計措置をしているからである。日本でこのような制度を採用しない限り、単位導入は不可能であるといえる。

現在の言語学会の基本的な形は服部四郎会長の時に作られたと言ってよい。服部会長の時に会員による選挙で会長を選ぶようになり、就任講演、任期制、地区別の評議員（以前は委員と呼ばれていた）を選ぶようになったのも服部会長からである。また、柴谷会長の時に大きな改革を行い、様々な小委員会や部会を作ることによって執行部の負担を軽減し、会員のボランティア活動により、学会の運営を行うようになっていった。したがって、現在の言語学会はこれら会員のボランティア活動によって成り立っていると言って過言ではない。

言語学会は大きな発展を遂げた。創立時の最初の会合では30人であった会員数も2000人を超えた時期もある。しかし、現在会員はすこしずつ減りつつある。これにはさまざまな原因がある。大学改革のもとに文系の研究が疲弊し、大学院で言語学や言語学関連の研究を行う学生が減ってきたこともあるし、他にも言語学関連の学会組織が多くできて、参加する学会を絞らないといけなくなってきたこともあるかもしれない。現在、言語学会は理論および実験、フィールドワーク、歴史比較・文献の分野が非常にバランスよく発表されており、扱われる言語も非常にバラエティに富んでいる。しかもそれぞれの研究者が互いに互いの研究に興味を持つようなほぼ理想的な状況にあるといえる。これからは言語学にとどまらず、統計数理、脳神経科学、AIなど関連する他の分野との交流を深めて、それらの分野の人に会員になってもらい、言語学会ひいては言語学の一層の発展に努めていかなければならないと感じている。

# Toward a Symbiotic Relationship between Theoretical Linguistics and Psycholinguistics

Masataka Yano

I am honored to contribute a short essay to the booklet celebrating the 80-year anniversary of the Linguistic Society of Japan (LSJ). Having come this far proves the continuous efforts of a dedicated committee and members always striving to improve the LSJ. After expressing my gratitude with respect to awards, I address my opinion regarding the current state of our linguistics community in Japan instead of reflecting upon its history (as only five years have passed since my enrollment).

## The Best Presentation and Paper Awards

I received the Best Presentation Award (LSJ154) in 2017 and the Best Paper Award (*Gengo Kenkyu* volume 149) in 2016. In the presentation at LSJ154, we discussed the relationship between sentence comprehension, syntactic knowledge, and conceptual accessibility based on the results of an event-related brain potential experiment in Truku Seediq, an Austronesian language spoken in Taiwan. This study was a collaborative work with Keiyu Niikuni (Tohoku University), Hajime Ono (Tsuda University), Sachiko Kiyama (Tohoku University), Manami Sato (Okinawa International University), Apay Ai-yu Tang (National Dong Hwa University), Daichi Yasunaga (Kanazawa University), and Masatoshi Koizumi (Tohoku University).

The paper, co-authored with the late professor Tsutomu Sakamoto (Kyushu University), is part of my PhD work, which addressed the issue of whether (morpho)syntactic and heuristic processes interact in sentence comprehension, with an aim to uncover the architecture of the language processing system. We are sincerely grateful to reviewers of *Gengo Kenkyu* and the audiences at the LSJ meetings for their valuable comments and suggestions to improve our work. We also appreciate the kind support from collaborators and participants in Hualien and Kyushu University.

## Toward a Symbiotic Relationship between Theoretical Linguistics and Psycholinguistics

According to Marr (1982), a full understanding of a complex information-processing system involves three levels of explanation, namely, computational, algorithmic, and implementational

levels, which correspond to theories of theoretical linguistics, psycholinguistics, and neurobiology of language, respectively, (e.g. Sprouse and Lau, 2013; see also Phillips and Lewis, 2010). If the language faculty is one such system implemented in the human brain, one of the major tasks for linguistics is to elucidate grammatical knowledge of languages, the algorithm of language comprehension/production, and the neural basis of language, and relate them to one another. Importantly, it is not desirable (or even possible) to examine only one level without any consideration of the others because the three levels are not independent of each other. Psycholinguists can deepen our understanding of the mechanisms of sentence processing and their neural bases if they have explicit theories at the computational level. Indeed, generative theories of syntax, for example, have played a significant role in providing a useful source of investigation to explore syntactic processing (Marantz, 2005), although other approaches have also been employed (see e.g. Embick & Poeppel, 2014; Poeppel & Embick, 2005). Insights from psycho/neurolinguistic studies, in turn, benefit theoretical linguists in that they can separate performance-related factors from the competence-related factors with which they are concerned. Furthermore, to the extent that a linking hypothesis reliably predicts real-time processing, psycho/neurolinguistic methods can be employed to test theoretical claims (rather than to only supplement them).

As discussed briefly, theoretical and psycho/neurolinguistics are closely related and should have a mutually beneficial relationship because the distinction between what is referred to as competence and performance is a conceptual distinction for the divide-and-conquer approach, not necessarily an empirical one. It is possible that we have been examining the same cognitive system at different levels of abstraction. I think it is great that every LSJ meeting has covered a wide range of topics in different fields. However, I am concerned that there is little interest and effort in having an interdisciplinary debate. This can lead to an undesirable state, especially for young researchers who have few opportunities for interdisciplinary training in Japan. Since LSJ has played a pivotal role in the field of linguistics for years, I hope that LSJ meetings will serve as an interdisciplinary place where members, as well as non-members such as undergraduate students, share and discuss their ideas to bridge theoretical linguistics, psycho/neurolinguistics and other related fields. I look forward to our linguistics community being not just diverse but more interactive across different areas.

# 大海の一滴

内藤 真帆

日本言語学会に入会して、およそ 15 年が経ちます。夜行バスに乗って初めて学会に参加したのは修士 2 年のときでした。あまりにも高いレベルの発表に圧倒され、自分がひどく場違いのところにいるような落ち着かなさを感じました。初めて手にした学会誌『言語研究』もまた論文が膨大な知と緻密な分析に裏づけられたものであることを院生ながら感じて、飛び込もうとしている世界の底知れぬ深遠さに慄きました。ところが、まさかその 3 年後に学会発表に挑もうとは。

「初学のうちに大いに恥をかいて食欲に学べ」との先達の声に、意を決して臨んだ発表の題目は「ツツバ語の舌唇音」でした。ツツバ語とは、南太平洋に位置するヴァヌアツ共和国のツツバ島で話される言語です。人口約 27 万のヴァヌアツ共和国は大小 83 の島々からなる島嶼国で、これらの島々では 100 あまりの固有の言語が話されています。ツツバ語はそのうちのひとつで文字を持ちません。話者数は約 500 人で、消滅の危機に瀕しています。

かつて、この国は 74 年もの長きにわたりイギリスとフランスの共同統治下にあり、1980 年に独立したときピジン英語であるビスラマ語を国語に制定しました。私は覚えたばかりのビスラマ語を用いて未調査のツツバ語を明らかにし記録にとどめようと、意気込んでツツバ島に渡りました。風習・文化の違いはもとより、電気・水道・ガスの無い島であることは覚悟の上でした。が、いざ島民と一緒に生活してみると立ちすくむことばかりで、思うように調査ははかどりませんでした。それでも何度か渡航・調査を重ねるうちに、どうにかツツバ語の語彙や文を収集し分析を進めることができました。

最初のうち、ツツバ語に 5 つの母音と 12 の子音のみを認めて記録と分析を行っていました。しかし調査を始めて 2 年が過ぎた頃、これまでに聞いたことのない音が高齢者の発音にまだ含まれていることに気づきました。発音を正確に聞き取れないのでは言語学をやる資格はないと怯え、調査をゼロからやり直すことにしました。注意深く何度もその不思議な発音を聴き、微細な口の動きを観察しました。同時に、自らも調音位置と方法を変えて発音を試みました。幾度となく繰り返すうちによりやく似た音にたどり着いた瞬間、鳥肌が立ちました。なんと世界約 7000 もの言語のうち、わずか 10 あまりの言語にしか報告されていない「舌唇音」でした。舌先と上唇で調音します。改めてジャングルに点在する住まい一戸一戸をすべてまわって調べたところ、この音を発音できる



人はもはや高齢者の7名のみとなっていました。

私は舌唇音が発音される瞬間の口の動きと、舌唇音から唇音への変化がわかる発音の瞬間を動画に撮り、音変化要因の分析と併せて、当学会で発表しました。あまりの緊張で質疑応答はしどろもどろ、壇上に立ったことを後悔しました。しかし、このときの先生方からのご指摘・ご助言・ご質問が糧となり、後に舌唇音に関する1本の論文をまとめ上げることができました。学会発表の意義を強く意識した体験でした。

実は、この時点でまだ学会発表までもたどり着けない難問を抱えていました。移動動詞です。ツツバ語には3つの移動動詞「のぼる」、「くだる」、平坦移動の「行く・横切る」が存在します。その中で平坦移動にも関わらず「くだる」が用いられて「行く・横切る」と対をなすことがありました。また、これから丘をのぼるにも関わらず丘を「くだる」ということがありました。さらに他島への海上移動のさいには、向かう島によって3つの移動動詞が使い分けられていました。これらの複雑な対立や使い分けが何に起因するのか、参与観察を徹底しましたがどうしてもわかりませんでした。

もどかしくも疑問のままに8年が過ぎました。半ばあきらめかけていたとき、「昔はみな丘の上に住んでいたんだよ」という言葉が蘇りました。なぜ畑だけが丘の上にあるのかを、畑仕事を手伝いながら汗まみれの高齢話者に訊いたときの返答でした。確か過去にも“昔”で始まる話を聞いた気がして記憶をたどっていくと、「昔この島に初めて宣教師が上陸した所も、ここヴェオア村だったよ」という言葉が浮かびました。これは私が初めてツツバ島に降り立ったとき大騒ぎとなり、そのさい長老にかけられた言葉でした。ついに気づきました。島民の昔の居住地『丘』、現在の居住地『海沿い』、宣教師の到来地『ヴェオア村』、この位置関係こそが移動動詞の謎を解く鍵かもしれないと。

私はすぐさまツツバ島へ渡りました。高齢話者をたずねてまわり、歴史と生活に焦点を絞って聞き取りを重ねました。すると、丘を下って宣教師のもとに通うようになった数名の島民が先ずヴェオア村に住み始め、それを機に最終的に全員がヴェオア村を端として海岸沿いに移り住んだことがわかりました。そして宣教師到来地のヴェオア村への移動に対し、丘の上に住んでいた時と変わらず「くだる」を用い続けた結果、「くだる」が拡張して「行く・横切る」と対をなすようになったであろうことが判明しました。このように解釈すると、あれだけ混沌としていた移動動詞が整然とひとつの規則性にのっとなっていることが見えてきました。

残すは、この規則性で移動動詞の使い分けを論理的に説明できるかどうか、再調査です。陸上はともかく、一瞬の油断が命取りになる海上での調査は困難を極めました。私は他島をめざす島民の小舟と一緒に乗せてもらい、あるときはうねりで機材ごと全身ずぶ濡れになり、あるときは献上物の暴れる豚を抑える役を命じられ、またあるときは鮫

の餌食となりかけながら、必死にデータを積み重ねました。

こうして得られたデータは事前の規則性とすべて合致し、分析の末に複雑な移動動詞の対立と使い分けが、歴史的・物理的・心理的な面から説明可能であることが解りました。また話者がどのように空間を認識しているかも明らかになりました。私は帰国してすぐに論文作成にとりかかりました。疲労困憊ながらも辛うじて書き上げると、手の届かない遠い存在であった『言語研究』に、祈るような気持ちで投稿しました。「ツツバ語の移動動詞と空間分割」と題したものでした。

その数ヶ月後、掲載された冊子を手にしたときは、マラリア罹患を含むこれまでのすべての苦勞が報われた思いがしました。そのうえ、後に若手研究者を育成する目的で創設された「日本言語学会論文賞」の受賞という荣誉にあずかることになりました。「この道を歩んでもよい」と、背中を押されたような気がしました。このことはその後も、ゆきづまったり窮地に陥ったりするたびに、支えとなり励みとなりました。

今年日本言語学会が発足して 80 年になります。広辞苑の編纂で著名な新村出先生を初代会長として 200 人近い会員でスタートした学会も、今やおおよそ 2000 人を擁する大きな組織となりました。その研究テーマも多彩かつ独創的で、それゆえ会員が互いに刺激・啓発し合って新しい着想を得たり思考を深めたり奮起したりという、よき連鎖を産む土壌になっています。国際化や情報化が急速に進む今日の社会にあって、世界の約 7000 もの言語のみならず学会や研究者を取り巻く環境もまた変化を余儀なくされています。こうした状況の下、日本言語学会はこれからも多様性を尊重する存在であってほしいと願っています。大海の一滴に過ぎない力ではありますが、私も研究を通して社会貢献に努めたいと思います。

# 日本契丹学小史

大竹 昌巳

1951年6月1日、毎日新聞（大阪本社版）紙面に驚くべき記事が載った。曰く、「十九世紀初めから各国の学者が解き悩んでいた未知の文字“契丹字”がかくれた日本の一言語学者によって百余年ぶりに初めて解読された。四月上旬発行の日本言語学会機関誌「言語研究」十七、十八合巻号所載の二十三頁の小論文「契丹字解読の方法」がそれ。筆者は順天堂医大予科ドイツ語教授村山七郎氏。」記事は大々的に契丹文字解読の成功を報じている。

村山七郎氏（1908-95）は当時の『言語研究』執筆者の常連の一人だ。戦時下には爆弾の降りしきるベルリンにあって、ソ連から亡命してきたアルタイ言語学の泰斗 N. ポッペ教授の講筵に列した経歴を持つ。

『言語研究』は戦後 1949 年に復刊したが、暫らくは謄写印刷（いわゆる「ガリ版」）による刊行を余儀なくされていた。そんな時代だった。だが、こうした状況も、「特殊な符号・文字などが自由に用いられる」（同誌 14 号彙報）と前向きに捉えるなら、その言葉どおり特殊な文字を随所にちりばめたこの論文を世に出すにはむしろ好都合だったかもしれない。

契丹文字は 1920, 30 年代に契丹の皇帝陵で発見されて以来、各国で解読の試みが進められていた。（冒頭の記事が「19 世紀初めから」と言うのは、パリの東洋学者クラプロートが『アジア博言集』（1823 年刊）で漢文史書に残る契丹語を紹介した時点から起算するため、実際には文字資料が現れる 20 世紀前半まで解き悩む学者は存在しえなかった。）当時はしかし、漢文資料との対比からテキストのごく一部の意味が推測されただけで、音価や綴字法の復元には成功していなかった。

村山氏の目を引いたのは漢文史書の記述だ。そこには「ウイグルの言語と文字を習得して契丹小字を製った」とあるが、村山氏はそのウイグルの文字とは突厥文字であり、契丹小字は突厥文字を模倣して製られたのだと仮定した。ここに、突厥文字との字形比較から契丹小字の音価を推定する道が開け、村山氏は「数十の契丹語名詞をローマ字化し、九百年前の契丹族の言葉をその発音までほぼ復元することに成功した」（前掲記事）のだ。

京大東洋史の田村実造教授（1904-99）は、同窓のアルタイ学者江実氏から村山論文の存在を聞きつけ、泉井久之助教授から同誌を借り受けて一読すると、すぐさま「契丹

文字の発見から解読まで—村山七郎「契丹文字解読の方法」を読む—と題する一文を同年8月発行の『民族学研究』に寄稿した。その文章は諸手を挙げて村山論文を称賛している。「いまやわが少壮学者の手によって、このような大成功がもたらされたことを、われわれは世界に誇るとともに、このよろこびをひろく同学の士にも頒ちたいと思う。」冒頭の新聞記事は田村氏のお墨付きがあって書かれたものだ。

ところがである。こうした論調と並んで、村山氏の解読成果に異を唱える者が現われた。神戸市外大の長田夏樹氏（1920–2010）だ。長田氏は7月のウラルアルタイ学会および12月発行の『神戸外大論叢』で「契丹文字解読の可能性—村山七郎氏の論文を読み—」と題して幾つかの疑義を呈した。その批判はどれも正当なもので、わけでも字素の配列順に関する指摘は致命的だ。契丹小字の字素を常に左→右の順で読むことには明証があるのに、村山氏は望ましい音列を得るため、ある時は右→左に、ある時は左→右に読んでいるのだ。解読が意味をなさないのは明らかだった。村山氏の解読は「成功」などしていなかったのだ。

かくて村山氏の試みは不首尾に終わったが、結果はどうあれ、田村氏に絶賛され、新聞記事として人口に膾炙したことが、新たな種を蒔くことになる。この記事は、当時大阪にいた第一銀行（当時）の豊田五郎氏（1918–2011）を契丹文字研究の道へと駆り立てたのだ。のちに豊田氏は、市井にありながら、抜群の才能を活かして契丹学の発展に寄与することになる。豊田氏の研究活動は学術誌での発表に加え、研究ノートを研究者たちに送付する形で行なわれたが、その姿は線文字Bの解読者M. ヴェントリスを想起させるものがある。最近、武内康則氏によって豊田氏の著作集が編まれ、研究の全貌が広く知られるようになったのは喜ばしい限りだ。

近年、こうした斯界の巨星が陸続と鬼籍に入られている。2010年に長田氏、翌年に豊田氏、その翌年に西田龍雄先生（西田先生も契丹文字研究に携わられた一人だ）、さらにその翌年に後述のチンゲルタイ氏が逝去された。訃報に接するたび、流れた時間の長さを痛感させられる。

さて、1951年の騒動以降、契丹学はどうなったか。1950年代は、文献の量的・質的制約から、実証的な成果を期待すべくもない状況にあった。だが、文献状況が徐々に改善されたことで、1970年代、遂に中国のチンゲルタイ教授（1924–2013）らの研究班が一時期を劃する研究を成し遂げた。大著『契丹小字研究』（1985年刊）は彼らが打ち立てた金字塔だ。

その後の飛躍的な文献量の増加とともに、以降も中国を中心に多くの研究が蓄積され、多量の音価推定・語形復元が行なわれてきた。契丹語の解読は順調そのものに見える。ところが、一皮めくれば、そうした推定形式の殆どが十分な根拠もないまま恣意的に決

められたものであることが露呈する。そんな杜撰な推定を重ねた結果、契丹学はいびつでちぐはぐな、構造なき構造物を創り上げてしまった。

ところで、文献言語学の最も重要な学問的意義は、「それまで誰も読めなかった文献を解説して、発音と意味を回収できる言語データにする」ことだと吉田豊先生は庄垣内正弘先生の追悼文（『言語研究』146号）の中で書いておられるが、このデータというのは、これ以上ないほど確実なものでなければならない。でなければ、言語データとしての価値は無きにも等しい。

私の試みは、旧来の契丹学が砂上に築きたいびつな楼閣を解体し、テキストに埋もれていた新証拠を掘り起こして基礎に据え、言語データとして有用な契丹語を新たに構築し直すことだ。『言語研究』148号に発表した拙稿「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」は、そうした作業の過程で見出した、従来看過されていた問題の一つを、できる限りの証拠を用いて論証したものだ。実に村山論文から64年ぶりに『言語研究』に掲載された契丹語研究論文である。

その拙稿は学会賞を頂いた。こうした初期段階にある分野の研究を評価していただいたことは、研究をさらにその先へ進める大きな励みとなる。選考に携わられた方々、また恩師の先生方にはこの場を借りて感謝申し上げます。受賞の一報を受け取った時、私は旧都サントペテルブルクの目抜き通りネフスキー大通りを走るバスの中にあった。せっかくの建築遺産の数々をぼんやりと窓の外に遣り過ごしながら私は、学会の名を冠するこの賞を貶めないよう、斯学の発展に少しでも貢献するような研究に精進しなければとの思いを強くした。

契丹学は今、世界的にも盛行を見つつある。昨年には、東洋学の権威誌、ハンガリー科学アカデミーの『アクタ・オリエンタリア』誌で特集号が組まれた。2022年には契丹文字発見百周年を迎える。この記念すべき年、契丹学は百年でどれだけのことを成し得ているだろう。会員諸賢は是非ご自分の目で確かめていただきたい。

# 日本語学会と私

長屋 尚典

私は、2012 年秋に九州大学で開催された日本語学会第 145 回大会における発表「タガログ語の相互構文」に対して大会発表賞をいただきました。この発表は、私が学部生のころから長年取り組んできたタガログ語のヴォイスに関する研究、特に中動態に関するそれを「相互」という機能領域に広げて分析した研究で、意味的に重なり合うところもある語彙的相互構文と統語的相互構文の文法的・意味的違いを明らかにしようとしたものでした。賞と呼ばれるものに縁のない人生を送ってきたので、とても驚いた記憶があります。発表賞をいただいたことと関係があるかどうかはわかりませんが、2013 年度から東京外国語大学でタガログ語と言語学を教えています。この度、日本語学会が 80 周年という記念すべき年を迎えるにあたり、大会発表賞をいただいた縁で、私と日本語学会との関わりや言語研究について少し書かせていただくことになりました。

そもそも、私が日本語学会に入会したのは 2006 年の春でした。大学院博士課程 1 年目だったときに、2006 年春季の大会で「タガログ語の自他交替」を発表したのがきっかけです。それ以降はアメリカの大学院に進学したこともあり、それほど多く発表することはありませんでしたが、2008 年秋季に「ラマホロット語の方向表現」、2009 年秋季に「知覚とヴォイス: タガログ語のヴォイス現象」と、一時帰国を兼ねて参加してきました。

アメリカで博士号を取得し帰国してからは、国立国語研究所でお世話になっていたこともあって、日本語学会にも頻繁に参加することになり、2011 年秋「タガログ語の pa-使役構文と責任」、2012 年秋「タガログ語の相互構文」、2013 年春「ラマホロット語の二つの所有標識と名詞化」、2013 年秋「タガログ語の動詞接辞 ma-の多義性: 自発、意図成就、可能、受身」、2014 年春「タガログ語の pa-形」、2014 年秋「タガログ語の重複と反復の形式と意味」、2015 年春「タガログ語の naka-結果状態構文」、2015 年秋「使役と事象構造: 重なる使役、繰り返す使役」(ワークショップ企画)、2016 年秋「タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結」、2017 年春「タガログ語の所有と存在の間」、2018 年春 80 周年記念シンポジウム、というように帰国した 2011 年の秋から 2018 年の春まで、7 年間で 11 回日本語学会で発表してきました。

何度も発表をしたため名前を覚えていただいたのだと思いますが、2015 年からは評議員に選出していただきました。2016 年には大阪大学での日本語学会夏期講座で「フ

「ワールド言語学」の講師を務めました。夏の暑い最中、6日間連続で講義したのはいい思い出になりました。今年2018年は東京外国語大学における夏期講座の実行委員の一人として、80周年にふさわしい夏期講座となるよう微力ながら尽力させていただいているところです。

このように言語学者としての私と日本言語学会とは切っても切れない関係にあるのですが、そんな私にとって、この学会は大きく3つの意味があります。まず、勉強する場所という意味があります。日本における言語研究が世界において優れている点はいくつかあると思いますが、少なくともその一つは、世界のさまざまな言語について地に足のついた記述言語学的研究が行われているところであると考えています。そして、その聖地というべき存在が日本言語学会です。毎年2回という頻度で開催される学会ながら、世界のさまざまな言語について質の高い記述的研究が発表されています。記述的研究が推奨されている学会であっても、浅い記述に覚えただけの理論を当てはめただけの研究や、学習者文法をまとめ直しただけの研究が多くなってしまいうところもありますが、日本言語学会ではそのような発表はあまりなく、質の高い研究に触れ、刺激を受け、研究のアイデアをたくさんもらうことができます。

また、研究を発表する場所としても、当然、日本言語学会は重要な場所です。たとえば、私が発表賞をいただいた発表のときも、ツングース諸語やサハ語の記述言語学を専門とする比較的専門が近い言語学者だけでなく、韓国語アクセント、日本語学、認知言語学、フランス語学などを専門とする言語学者からもフィードバックをいただくことができました。さまざまな言語をいろいろな理論によって研究する人たちが集い、発表を聞いてもらえるというのは、世界に他にあまり例を見ない貴重な学会だと思います。

さらに、今では、後進の指導をしていく上でも、日本言語学会は大切な役割を担っています。私は東京外国語大学という記述言語学を専門とする教員・学生が多くいるところで教えています。このため、学生たちにはことあるごとに日本言語学会に入会し、そこで勉強し、発表することを勧めています。実際、自分のゼミに属する学生も学部生ながら発表してくれました(第153回大会・第154回大会の中本舜くん、第156回大会の鈴木唯さん)。大学院の授業のあとでは、外大近くの居酒屋で、日本言語学会のプログラムを片手に飲みながら、発表賞を予想したり、発表賞を受賞した発表について論評したり、言語研究のあり方について議論をすることもあります。日本言語学会の存在、そして発表賞が、若い研究者の励みとなっていることはいくら強調してもしすぎることはないと思います。

このように、私にとって、勉強する場として、発表する場として、また、学生の指導をしていく場として、日本言語学会は大切な学会です。私も一人の言語学者として、自

分自身の研究と後進の育成を通して、日本言語学会の発展に貢献し続けることができた  
らと思っています。今年 80 周年を迎える日本言語学会が、この先、90 年、100 年と続  
いていくことを祈念しています。



## 日本言語学会の活動に携わって

梅谷 博之

日本言語学会（以下「言語学会」とします）と私との関わりは諸先生方に比べて浅く、本冊子への執筆依頼が私に届いた時には驚きました。しかし折角頂戴した機会ですので、言語学会と関わる中で感じたことを書かせて頂くことにいたしました。

私が言語学会と初めて関わったのは、およそ 20 年前（1999 年）の 6 月に、東京都立大学での大会で口頭発表をした時です。当時私は博士課程に進学したばかりでした。修士論文の一部を要旨にまとめて応募し、幸運にも採択され、当日はとても緊張しながら発表したのを覚えています。発表後、何人かの方から質問や助言を頂きました。自分の研究に興味を持って下さる方がいることを知りとてもうれしく思いました。大学院生の時の言語学会との関わりと言えば、このように大会で発表して「学会を利用させて頂く」という形に限られていました。

その後 2006 年に上野善道先生が会長に選出され、林徹先生が事務局長になられました。両先生に教わった私はお声掛けを頂き、事務局長補佐として学会運営の一端に携わることになりました。言語学会の組織がどのようになっている、どのような方が運営に関わっているのかを、その時まで私は全く知りませんでした。事務局長補佐としての最初の仕事は、常任委員会の準備と当日の議事録作成でした。常任委員会の準備のために言語学会の「役員一覧」を初めて見たのですが、様々な委員会や小委員会があり、実に多くの方々が運営に携わっていることに驚きました。そしてさらに驚いたことに、実際に常任委員会に出てみると、その場にいらっしゃった先生方は言語学会の諸事情に通じておられ、運営の実務に関する細かいことまでもよく把握していらっしゃいました。研究や本務先での用務でお忙しい中、言語学会の運営にも時間と労力を割いている方がたくさんいらっしゃることを知り、言語学会の「すごさ」を感じると同時に、「言語学会を運営するということはとても大変なことだ」とも思いました。学会運営の記録が『言語研究』の「彙報」というところに掲載されていることを知ったのも、この時が初めてです。「彙報」掲載用の常任委員会の議事録を作成するために過去の彙報を参照したのですが、言語学会の多種多様な活動が何十年にもわたって続いていることを知り、その歴史の長さにも三度驚かされました。

その次に私が言語学会の運営に携わることになったのは、梶茂樹先生が会長に選出された選挙で林徹先生が編集委員長になられた時です（2012 年）。その時には編集委員長

補佐として『言語研究』の編集に携わりました。執筆者や査読者との連絡、投稿原稿の査読・編集状況の把握、原稿の校正などを主に担当しました。一つの論文が『言語研究』に掲載されるまでに、多くの手順が踏まれ、多くの人の手を経ていることを知りました。学問が細分化された今日、一つの投稿論文に対して査読をお願いできる方の数はとても限られています。査読を引き受けて丁寧なコメントをお送り下さった方々に、僭越ながら、そして今更ながら、心より御礼申し上げます。

言語学会の活動が評価され、『言語研究』が高い学問的水準を維持しているのは、こうした方々のご尽力があつてのことですが、そのご負担は相当なものです。そうした方々のご負担と比べるのはおこがましい限りですが、『言語研究』の編集に私も少なからず時間を費やしました。そうした中で、執筆要項での参照文献表作成の指示書きをより具体的にすることで、執筆する側と校正する側の双方の作業量を軽減することができるのではないかと考えました。もちろん、それまでの編集委員会が作成してきた執筆要項も、細かいところまで配慮が行き届いたすばらしいものでした（参照文献表を『言語研究』に準ずる形で作成するよう指示する雑誌も存在する程です）。しかし、ある種の文献（例えばウェブサイト）の挙げ方については未指定であつたため、投稿原稿によって記載方法がまちまちで、それを揃えるために時間を取られることがありました。そこで、編集委員長と相談しながら執筆要項の参照文献に関する指示を一部改訂しました。指示が細かくなりすぎて執筆者にはかえってご負担をおかけすることになってしまったかもしれませんが、参照文献表の書き方がより明確になったとお感じになった方が一人でもいらっしゃれば幸いです。ただ、それ以外では編集委員会全体としての作業量軽減に結びつくような貢献は何もできず、そのまま次の編集委員長補佐の方に引き継ぐことになってしまいました。これについては残念に思っています。

大会の話に戻りますが、2013年6月に茨城大学で行った口頭発表に対して、発表賞を頂戴いたしました。こうした賞は駆け出しの研究者の励みになります。可能であれば今後もこうした制度を継続して下さればと思っておりますが、その一方で、受賞者選定の作業に多くの労力が費やされていることも容易に想像できます。言語学会の活動がますます盛んになっていくことを期待する一方で、運営に携わる方々の負担が大きくなることも願う次第です。

次回大会は現在の勤務先（東京大学本郷キャンパス）で開催されます。しかも、80周年という節目に開催される重要な大会です。今回も多くの方からご助言、ご協力を賜りながら、大会が滞りなく開催されるよう微力ながら運営に関わらせて頂く所存です。

## 日本語学会と傍流会員の16年の歩み

木山 幸子

私が最初に日本語学会に関わったのは、2002年に東京外国語大学で開催された第124回大会で運営補助のアルバイトを勤めたときだった。当時西ヶ原から府中の新キャンパスに移転したばかりだったピカピカの校舎同様、私も、早稲田から外語大修士課程に進学したばかりのピカピカの1年生だった。早津恵美子先生の月曜1限から2コマ続きの(しばしばお昼休みまで続いた)授業を受講したところ、さっそく春季大会の学生アルバイトの募集があつて応募したのであつた。割り当てられたのは受付で過去の大会予稿集を売るといふ閑職で、本職よりも会場内外の場所を尋ねられるばかりで新入生ではろくに答えられず、まったく無用のアルバイトだった。早津先生はそんな私にも「木山さんもそのうち発表したら」と声をかけてくださったが、その時はまだ会員ではなかつた。

遅ればせながら私が言語学会に入会したのは、その後麗澤大学の博士課程に進学し、2008年に金沢大学で開催された第137回大会の口頭発表に応募しようというときになつてからだった。英語で博士論文を書きたいという私に、指導教員の玉岡賀津雄先生はこの大会で英語で発表するようにおっしゃつた。留学経験もなく、英語が専攻でも得意でもなかつた私の意味不明な英語を一から鍛えてくださった。発表の時には、もう一人の指導教員の滝浦真人先生、司会をしてくださつた時本真吾先生、言語学会での発表を最初に促してくださった早津先生、今では同僚となつた小泉政利先生など、多くの先生方が私のつたない英語をあたたかく見守ってくださった。予稿集の図の文字が小さすぎてこれでは意味がないと、当時大会運営委員長の井上優先生に叱られたことも、今となつてはなつかしい。そのときの会場のおおらかな雰囲気、10年後の今でもありありと思ひ起こすことができる。

それから言語学会では筆頭で5回、共著で5回発表した、その中で私にとって一番思い出深いものとなつたのは、2012年に東京外国語大学で開催された第144回大会での口頭発表である。前年に麗澤大学で博士号を取得し、これからは自分らしい研究ができるようになりたい、実験的・神経科学的アプローチによって日本語に特徴的な語用論の現象を調べて国際的に発表できるようになりたいと思つていた。10年前に役立たずだった私が再び外語大での大会に戻り、今度は終助詞の理解における個人差についての実験結果を発表し、発表賞をいただくことができた。私のやりたい研究を自由にするよ

うに後押ししてくださった玉岡先生と、玉岡研究室に集う（ちょっと変わっているかもしれないけれど）ただ実験が好きという仲間たちとの協同によるものだった。人を喜ばせも怒らせもする終助詞の変わり身のおもしろさに惹きつけられたのは、麗澤大学で『ポライトネス入門』の著者滝浦先生の警咳に接することが叶ったからであった。

その後も、長かったポストク時代、名古屋大学で終助詞を介する感情の動きやその理解の個人差の影響を調べる脳機能実験を続けたが、論文化は難航した。ずっとこの研究に専念していたわけではなく、国立長寿医療研究センターでの脳機能研究、三重大学教養教育機構での初年次英語教育と、いずれも本来の専門とは異なる勤務の機会に恵まれた。その間も、私の目を世界に向けてくださったフィールド実験言語学の小泉先生は、もう何年も経っているのに折に触れ私の発表賞を話題にし、ただ“*Yes, you can!*”と言いつづけ、先生がそうおっしゃるならできるかもしれないと奮い立たせてくださった。今年ようやく、終助詞理解に関する 2 度の脳波実験の結果をまとめた論文が *Journal of Neurolinguistics* 誌に掲載された。この研究の萌芽の頃、言語学会で発表賞を受けた 2012 年から数えれば足かけ 6 年、実験刺激を作成した時からすれば 7 年が経っていた。難航したようでも、異分野での研究や教育の経験が自分の関心事を相対化して見る眼を与えてくれ、それによって、東アジア言語における文末詞の発達過程やその神経基盤を通言語的に追求していきたいという、これからの研究者としての柱が備えられたのかもしれない。

私にとって言語学会でもう一つ意義深いことは、2011 年に学会誌『言語研究』139 号に、自他両用の「一化する」（例：「日本言語学会が/を活性化する」）の用法をコーパスで調べた論文が掲載されたことである。これが私のはじめての筆頭著者としての査読付き論文だった。博士論文研究の論文投稿が難航している中、玉岡先生のおすすめでこれまでの研究とは少し毛色が変わったコーパス研究に取り組んでみたところ、おもしろくて夢中で分析した。当時の編集委員長は窪菌晴夫先生で、査読の先生方にも恵まれ、そのご助言によって修正する作業がまたおもしろく、博士論文を一時放り出して書いた。早期の学位取得という目標からすればまわり道をしたかもしれないが、自分の論文が人に認められる日なんて来ないのではないかと思いつめていた私が、はじめて論文が採択される喜びを知った。

このような寄り道してばかりの私の道筋は、言語学会での活動と交流によって何とか途絶えずにつながってきた。私が東北大学言語学研究室に専任教員の職を得て、同じ関心を共有する仲間と研究を続けられるようになったことには、言語学会で発表賞をいただいたこと、『言語研究』の論文を認めていただけたことが大きく働いたように思う。この論文を書いたときには、これをコーパス言語学の後藤齊先生や語構成の斉藤倫明先

生に読んでいただけるとは夢にも思わなかった。論文は、採択されたときにうれしいのはもちろんのこと、忘れた頃に思ってもみない人（かねてから仰ぎ見るその道の第一人者）におもしろいと言っていたら、これほどにうれしいものかと身をもって知った。指導教員の玉岡先生と滝浦先生をはじめ、上に挙げたすべての先生方が、私が今の勤めをつつがなく果たしていけるようにと祈ってくださった。そして言語学会の外にあっても、学生時代から今に至るまで、私がいかに多くの教えや励ましに導かれてきたかは、本稿の趣旨から外れるので触れることができない。

言語学最古の伝統ある学会でありながら、私のような変わり種の研究も受け入れてくれるおおらかな言語学会が、これからもそうあってほしいと思う。私が今接している学生たちが、その素朴な関心を研究として結実させていくまでに、言語学会で私が得た以上のものを得てほしいと願う。

## 日本語学会よ、永遠なれ

三村 竜之

北海道内でも一、二を争うほど温暖な室蘭市に冬の訪れを感じ始めた 11 月某日、日本言語学会事務局より一通のメールが届いた。件名は『『日本語学会 80 年の歩み』寄稿のお願い』。あらあら、今じゃこんなスパムメールもあるのかしら、用心しなきゃ、と思いつつ念のため本文を確認すると、どうやら本当に私に寄稿を依頼する本物のメールであることが判明。しかし何でまた私なんぞに、と訝しく思いながらも、これは大変名誉なことだと思いつつ、二つ返事で快諾のメールを事務局へ差し上げた。

時は流れて「東京ではお花見シーズン真っ盛り!!」といった文句がテレビから聞こえ始めた 3 月某日、ようやく重い腰を上げて、愛用する iMac に向かい執筆にとりかかったものの、一向に筆は進まない。困った。「いっそ酒の勢いに委せて」などと企みはしたが、幾ばくか残る良心の呵責に堪えかねて真っ当にテーマを探し始めたその矢先、あの問いに再び出くわした:「そもそも何故私なのか?」。灯台下暗しとはよく言ったものである。その答えは事務局から賜った依頼のメールに記されていた。なにになに?「学会賞受賞の感想 ... などを ... 自由に書いていただき ...」。なるほど、そういうことだったのか。よし、テーマは決まった。

という訳で、手前味噌で甚だ恐縮ではあるが、私は日本語学会第 150 回大会にて行った口頭発表で「大会発表賞」を受賞した(「何故私が?」って、しつこいですね)。振り返れば 20 数年前、博士課程に進学したのを契機に日本語学会に入会し、初めて学会発表なるものを経験した。言語の研究を夢みて彷徨っていた学部生の頃は畏怖の念すら抱いていた日本語学会での研究発表。その場に初めて立った日のことは今でも忘れられない。論文や研究書を通じてお名前は存じあげていた方々からの批判や助言に耳を傾けながら、自分のこんなちっぽけな研究でも受け入れてもらえるのか、と、驚きと気恥ずかしさと自信が入り混じった複雑な気持ちで胸がいっぱいになったことをはっきりと覚えている。以来、留学中の数年間を除き、ほぼ毎年のように、日本語学会では研究発表の貴重な機会を頂いてきた。勿論、いつも順調に研究が進んでいたというわけではない。なかなか思い描くようには研究が進まず心身ともに疲弊した時期もあったが、そんな折も、日本語学会での研究発表を目指して自らを奮い立たせたものだった。言うなれば、日本語学会での研究発表は、聴衆の方々からの貴重な批判や意見も含めて、それ自体が私の研究の支えであったのだ。無論、その思いは今も変わってはいない。

今や掛け替えのない存在となった日本言語学会から研究発表を表彰されたことは、私にとっては紛れもなく大きな誇りである。この場をお借りして、選考に携わった方々に心よりお礼を申し上げたい。

大会発表賞の受賞に関してはもう一つ付け加えなくてはならない大切なことがある。話がいささか私事にわたることをお赦し願いたい。私の恩師は日本語諸方言のアクセント研究の分野においては文字通りの巨星と呼ぶに値する方である。研究に対する姿勢は今もってなお真摯かつ厳格であり、人望の厚さ故に日本言語学会の会長もお務めになった。さて、博士課程に進学してから既に数年が経過していたので 30 代になったばかりの頃だったろうか、恩師も同席するとある音韻論の研究会の酒宴の席でのこと。「今後の目標は？」と問われ、あろうことか「先生がご存命の内に、先生に「面白い!!!」とおっしゃっていただける論文を書きたいです」と答えてしまったことがある。当時の私にしてみれば、偉大な学者を師と仰ぐことの喜びと幸せを言葉に表したつもりだったのだろうが、子を持つ親となった今にしてみれば、いくら酔いが回っていたとはいえ、若気の至りでは到底片付けることのできない、なんと失礼なことを申し上げてしまったのかと、甚だ情けなくなる。その数年後、不出来な教え子のまま師の元を巣立ってしまい、件の目標は達成させられぬまま月日だけが流れてしまった。大会発表賞の受賞は、そんな最中での出来事だった。数々の名高い学術誌に夥しい数の論文を残してきた恩師の眼には、大会発表賞はさぞやとるに足りないものと映っているに違いないと勝手に思い込み、受賞のご報告はせずじまいであった。しかし、授賞式場で祝いの言葉をかけて下さった恩師の姿を拝見し、その思いは一気に打ち消された。確かに掲げた目標は今持って達成されてはいない。しかし大会発表賞の受賞によりその数十分の一程度は達成されたのではないかと、都合よく自負している。この賞が、師を持つ喜びを与えてくださった恩師に対するほんのささやかな贈り物にでもなるとすれば、私にとってこれに勝る至福はない。

さて、近年、政治や経済など諸々の事情を反映した結果であろうか、特に我が国では「グローバル化」という錦の御旗の下、「ある特定の外国語」が偏重されるきらいがある。教育の世界もその影響を受けてのことであろう、まるで「ある特定の外国語」以外は学ぶに値しないと云わんばかりの風潮が甚だ著しい。しかし、外国語は富や利権や名声のために学ぶのではない。外国語は学ぶ者を偏狭な思考から解放し、自身が生まれながらにして身につけた言語や文化に新たな眼差しを向けさせる。自らの中に新たな発見をした者は自身の思考をさらに解放する。言語はかように人間の知の基盤をなすものであり、それ自体が学び究めるに値する存在なのである。国内外の様々な言語の魅力に取り憑かれた者が集う場として、日本言語学会は実に 80 年の長きに渡って在り続けて

きた。歴代の会長をはじめ、運営と存続に携わってきた全ての方々に心から敬服する。我が国の学問、とりわけ人文科学の行く末を案ずる者の一人として、日本言語学会の未来永劫に渡る発展を心から願い、創設 80 周年の祝辞を贈りたい：日本言語学会よ、永遠なれ。



## 言語学会と私

平田 未季

私が言語学に興味を持ったきっかけは、高校生の時、たまたま読んだトルコ語に関するエッセイだった。「Ben (私は) sana (あなたに) para (お金を) ver-dir-me-di-m (出さ-せ-な-かった)」というように、トルコ語と日本語が語順どころか動詞の後につく接尾辞の順までほぼ一致すること、それにも増して、自分がこれまで全く意識せずに一定の順に接尾辞を付けて日本語の動詞を活用させていたことに気づき、衝撃を受けた。完全にコントロールしているつもりだったことばの背後に、自分が把握していない規則性があることは不気味であると同時に魅力的で、それまで当たり前だと思っていた世界の裏側が垣間見えたような気がした。

しかし、北海道大学文学部に入学後、その時の興奮と実際の言語学の研究とはなかなかうまく噛みあわなかった。言語学情報講座における Saussure、Bloomfield から始まる講義はどれも大変刺激的だったが、講義を通して感じたのは、知りたかったことに迫りつつあるというワクワクよりも、いわゆる「言語研究」への道程の遠さだった。知りたいことへ研究としてどうアプローチすればよいのか分からない日々、周囲ではフィールドワークによるアイヌ語や北方諸言語の調査が盛んであり、研究室にこもって文献を読むばかりの自分の現状にも焦りを感じた。

そんな中、当時指導教官であった門脇誠一先生から、あなたの関心に近い指示詞に関する日韓対照研究の発表があるから見に行ってもどうかと勧められ、初めて参加した学会が、日本言語学会の第 125 回大会 (2002 年) だった。初めての研究大会の印象は、とにかく「敷居が高い」というものだった。理論的背景を持つ緻密な分析や、各地でのフィールドワーク・膨大な文献調査に基づく方言および少数言語の研究はどれも、これが「言語研究」だ！という迫力を感じさせるものであり、自分には到達しえない境地のように思えた。

しかし、同時に、同大会ではこれまで見えなかった「知りたいことへのアクセスの可能性」を感じさせてくれる発表にも出会うことができた。1つは、門脇誠一先生が紹介してくださった金善美氏のドラマをデータとする指示詞の対照研究であり、もう1つは、鈴木亮子氏を中心とする「話し言葉のデータを使った文法研究の可能性」というワークショップである。どちらも自分を取り巻く環境とそこに存在する日常的なことばのやりとりに目を向けたもので、「このような研究もありなんだ」という新鮮な気づきと、忘

れかけていたことばへのワクワクを与えてくれる発表だった。

そこから、日常のやりとりを研究対象とすることに強い興味を持つようになったが、学部では、指示詞のテキスト内での用法をまとめるにとどまった。当時、発話場面におけるコ系・ソ系・ア系の意味機能の分析は既にやり尽くされているように見え、なかなか一步を踏み出すことができなかつたのである。しかし、大学院での指導教官であった上田雅信先生から、指示詞を研究するならまずその根本である現場指示を見るべきだと強く勧められたこと、また、2000年代前半からマックス・プランク心理言語学研究所の研究者達がフィールドワークに基づく空間表現の分析を発表し始めたことに勇気づけられ、大学院でようやく、私なりの「フィールドワーク」を始めることにした。

私のフィールドは、大学にほど近い札幌駅と直結した地上38階の展望室だった。展望室内の喫茶コーナーのソファに座り、コーヒーを片手に、窓の外を指さして話している人々の会話に聞き耳を立てその様子をメモするという随分と優雅な「フィールドワーク」だったが、その時、理想として頭にあったのは、無謀にも、クレイグ・レイノルズ (Craig Reynolds) の「ボイド (boids)」モデルであった。墓地でカラスの群れを観察し続け、その動きを個々が従う3つの規則に集約し、群れ全体のふるまいを再現するプログラム「ボイド」を開発してみせたレイノルズのように、いつか、わずかなルールで現場での対話参加者のふるまいとその中で指示詞が果たす機能を記述できたら。そんな夢のような考えを持ち、年間パスポートを買い展望室に通った。

しかし、分析はすぐに壁にぶつかった。生のやりとりの場面は予想を遥かに上回り複雑だった。現場で発せられる1つの指示詞の周囲には無数の要素が存在しており、しかもそれらは絶えず相互作用をしていて、たった1つの条件の変化が常に大きく状況を変えていく。その中で発話される指示詞は、要素間の相互作用の結果ではなく、相互作用し合う要素の一部であり、発話された指示詞が次の状況を生み出してやりとりは切れ目なく続いていく。そんなやりとりを生み出す何をどこまで記述すべきなのか途方に暮れたものの、それでも、そこには、確かに意識されていない規則性、トルコ語を知った時に感じた世界の裏側への入り口があるように思えた。

そうこうしているうちに気が付けば博士後期課程、いつまでも現場を眺め続けているわけにはいかないので、研究としてそれをまとめるべく、上述のマックス・プランク心理言語学研究所の研究者達の手法を取り入れることにした。彼らは、フィールドワークで得た豊富な文脈情報を含むデータを分析に取り入れつつ、そこから文脈普遍的な指示詞の意味を抽出しようとしていた。まずは、彼らが用いる分析の枠組みと概念を目の前の現場に当てはめ、その他の要素はすべて切り捨ててみることにした。

そのように手探りで進めてきた研究の一部が、『言語研究』146号に掲載されたソ系

に関する論文、また、発表賞をいただいた第 150 回大会での指示詞の質的素性に関する発表につながった。これらの研究が「言語研究」の本丸である言語学会に受け入れられたことは、率直に言って意外であった。自分の行っていることが、かつて圧倒された緻密な分析や膨大な調査に基づく研究とはかけ離れているのではないかという不安が常にあったためである。しかし、学部生の頃とは異なり、絶対的に揺るぎのないように見えたどの研究も、複雑で捉えどころのないことばという現象を前に、それぞれの理論的枠組みと仮説を選び、焦点を当てる特定の現象を選び、それとともに他のすべてをあえて切り捨てながら進んでいるのだということも分かってきた。その中の 1 つとして自分の研究が位置付けられたことは大きな喜びであり、現在も試行錯誤の真ただ中である研究を続ける上での支えになっていることは言うまでもない。

創設から 80 年を迎える言語学会は常に日本の言語学の中心的な存在であったと思われる。ことばに関する研究が多様性を増し、学際的にも広がりを見せる中で、言語学会が、今後も冠のつかない「言語」学会として、ことばについてのあらゆる現象を取り上げ、「このような研究もありなんだ」と感じられる研究と、かつて私が迫力を感じたいわゆる伝統的な「言語研究」とを並行して扱う場であってほしい。私にとって言語学は日々使用している 1 つ 1 つのことばを通じて世界とは人とは何かを問うことができる非常に魅力的な学問だが、研究としてそれに接近することは、何かを選ぶと同時に魅力的な何かを切り捨てることだった。言語学会が、自分が選ばなかった何かを取り上げそれを異なる理論と仮説を用いて分析している他の誰かと出会うことができる場であり、異なる選択をした者同士がフラットに議論することができる場であれば、非常に心強いと考える。

# 日本語学会と私の言語研究

山田 洋平

日本語学会が設立から 80 周年を迎えたことに、心より喜び申し上げます。私がモンゴル語族ダグール語のフィールド研究を始めてまだ十年余り、日本語学会大会に参加するようになってまだ五年も経ちませんが、微力でも日本の言語学の発展に貢献できているとすれば幸いです。日本の言語学がこれからどのように展開していくのか、不勉強の私にはなかなか想像できません。しかし日本語学会がこれから 90 周年、100 周年を迎える時、この学術分野は私たちの社会を支える役割を担うものとしてさらに重要性を増しているものと思います。私の研究がそんな言語学の将来に一石を投じるものとなるよう、私も邁進していく所存です。

私は 2016 年秋の日本語学会大会で「ダグール語の二種類の否定形式」という題目で口頭発表をし、発表賞を受賞いたしました。学会発表というものに恐れをなし、なかなか応募する勇気も出せずにいた私ですが、初めて口頭発表を行ってからは発表賞を一つの目標として大会に参加してきました。研究の内容もさることながら、私のプレゼンテーションのあり方はまだ多分に改善の余地のあるものだと日々反省するばかりです。フィールドワークを通じての言語研究は人との繋がりが重要である一方で、研究を進める過程はどれも独り善がりになりがちなこと、私が立ち向かうべき課題です。発表賞を受賞できたことは、学会の先生方皆様がそんな私の研究に目を向けてくださっていることに改めて気づかせてくれるものでした。私が居を一時モンゴルに移すこのタイミングでの発表賞受賞は、私の研究にとって一つの大きな区切りであるとともに、今後も研究を進めていく上で大きな励みであり、自身の研究に対する姿勢を見つめ直す契機ともなりました。発表賞に選んでいただき、選考委員の方々ならびに発表に耳を傾けてくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

ダグール語という言語はモンゴル語族の言語で、古い時代のモンゴル系言語の特徴がある側面において保持している点や、周囲のツングース語族の言語の影響を被っている点などが興味深い言語です。モンゴル語の学習を進める過程で、その地域差や多様性に関心を持った私は、危機言語の記述に使命を感じダグール語の研究の道を選びました。ダグール語の話し手が多く暮らす中国東北部は歴史的にも日本と関わり深い地域で、勉強不足のままフィールドに入った私にダグールの方々はいろいろなことを教えてくれました。私がダグール語の研究を続け、その成果を日本語学会で発表するに至るまで

には多くのダグールの方々が多く協力してくださり、また未熟な私に優しく手を差し伸べてくれたからに他なりません。ダグールの皆様に対する感謝は尽きることはありません。発表賞の受賞に甘んじることなく、これからも引き続き研究を進め、より大きな成果を出すことで恩返しをしていきたいと思っております。

ダグール語は地理的にもモンゴル語と近接し、見方によっては当然ながらモンゴル語によく似た言語です。無批判に先行研究を読み語学的な学習をする中で、こうした言語の記述をすることにどのような面白みを見出すことができるのか悩む時期がありました。こうした状況を打破するべく、日本言語学会大会での発表は私の着眼点が果たして的確であるのか、研究としての発展性があるのか、より端的には「面白いのか」といった点を確認する場として位置づけました。

「ダグール語の二種類の否定形式」という研究も、日本言語学会大会での様々な研究発表に着想を得て調べ始めたものです。現代モンゴル語で動詞文の極性は、動詞の後ろに否定の要素があるかないかで示されます(動詞・否定)。他方、中世モンゴル語ではこれが動詞の前に置かれる否定の要素の有無で示された(否定・動詞)ことが知られています。現代のモンゴル語族においても前に置かれる要素で否定を表す言語がいくつかあることから、現代モンゴル語では歴史的な変化によって前置の否定が後置の否定に取って代わられたのであろうと考えられます。ダグール語ではこうした前置の否定と後置の否定が共存し、ある条件下でそれぞれが使い分けられています(ex. *id-gu uwei* [食べる 否定] ⇔ *ul id-n* [否定 食べる])。ダグール語に二種類の否定形式があることは、言わば現代モンゴル語で起こった言語変化の過渡期の様相を示しているものと考えられます。モンゴル語族の諸言語の言語史を考える上で、ダグール語における両否定形式の使い分けや、モンゴル語族における否定形式の変化の趨勢は大切な要素です。この研究の先にある、モンゴル語族の諸言語の言語史を解き明かすにはまだまだ多くの壁がありますが、今回本発表を日本言語学会大会で行い先生方のご意見を賜ったことで大きな一歩を踏み出すことができたかと確信しております。モンゴル諸語をはじめとするアルタイ諸言語の研究は、日本語の類型を論じる上でも今後重要性をさらに増していくことでしよう。

日本言語学会80周年という記念すべき節目に、私の拙文を取り上げていただけて光栄です。今後のさらなる日本の言語学の発展を祈念して書き終えることといたします。

## 語用論的文法研究の原点 —Charles J. Fillmore の研究—

澤田 淳

筆者が最も大きな影響を受けた研究に、Charles J. Fillmore の研究がある。Fillmore は、2014 年、84 歳でこの世を去った。世界中の言語学者がこの希代の学者を悼み、その偉大な功績を讃えた。

筆者が Fillmore の著作に初めて触れたのは学部学生の頃であったが、その文体から滲み出る透徹した知性、ユーモア、誠実さに惹かれると同時に、統語論、意味論、語用論を三位一体的なものとして捉えて、総合的な文法記述をおこなう姿勢(“pragmantax”の姿勢)に強く心を動かされた。意味を「場面」(scenes)との関係性の中で捉え、視点、ダイクシス、前提、言語行為、会話の推意、ポライトネス、談話構造などの語用論的情報をも織り込んだ形で文法記述をおこなう。これは、ダイクシス研究、フレーム意味論、構文文法論、フレームネットなど、Fillmore が開拓した全ての枠組み、アプローチに通底する研究姿勢である。

Fillmore の研究の随所に日本語に対する深い造詣と愛情が感じられる。Fillmore が 1953 年に米軍の一員として来日し、除隊後の二年間、『訓点資料と訓点語の研究』(1952 年)などの著者として知られる京都大学の故・遠藤嘉基教授(国語学)のもとで日本語の勉強をおこなったという話(船城道雄. 2001. 「フィルモア」『言語 別冊—言語の 20 世紀 101 人—』第 30 巻第 3 号、大修館書店、参照)を知ったのは、筆者が大学院(京都大学)に進学した後のことであった。

Fillmore の研究領域は多岐にわたるが、1975 年に Indiana University Linguistic Club から出た *Santa Cruz Lectures on Deixis* (1971 年夏にカリフォルニア大学サンタクルーズ校でおこなった講義録であり、1997 年に *Lectures on Deixis*, CSLI Publications して出版されている)は、とりわけ古典的名著として名高いものである。哲学のテーマであったダイクシスを、言語学、とりわけ、語用論の中心テーマとして位置づけ、空間表現、時間表現、人称表現、指示詞、come/go などの多様な語彙・文法現象の分析をおこなっている。*Santa Cruz Lectures on Deixis* では、視点、空間参照枠、時間メタファーなど、認知言語学の主要テーマを先取りした記述が多く含まれているが、現在の認知言語学において、これらの古典的成果が正当な形で継承されているのかは疑問が残る。たとえば、時間メタファーの研究では、Lakoff and Johnson (1980) の *Metaphors We Live By* が出発点として論じられることが多いのではないだろうか。

ダイクシスは、敬語や授受表現を発達させている日本語においてはとりわけ重要な現象と言える。筆者は、本学会誌において、「日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化—他言語との比較対照と合わせて—」（『言語研究』145号、2014年）と題する論文を発表する機会に恵まれたが、この論文の問題意識の根底にはダイクシスがある。

*Santa Cruz Lectures on Deixis* は“MAY WE COME IN?”と題する章から始まる。Fillmoreは、“May we come in?”という一見何の変哲もない発話文に対する徹底した意味解釈を通して、「母語話者が持つ言語知識とはどのようなものであり、この言語知識の総体はどのように記述されるべきであるか?」という言語研究の根本的な課題を提示している。

ここで、*Santa Cruz Lectures on Deixis* でなされている“May we come in?”の記述の一部を少しだけ紹介してみたい。この発話文からイメージされる場面は明白である。この発話文からは、話し手とその同伴者が構外（建物の外）におり、構内（建物の中）にいる聞き手に尋ねている場面が思い浮かぶ。しかし、この短い発話文の意味解釈の背後には、視点、ダイクシス、モダリティ、言語行為、ポライトネスなどが関わる豊穡な意味世界が広がっている。

移動動詞 *come* は、「発話時（＝今）に話し手がいる位置への移動」、「発話時に聞き手がいる位置への移動」、「参照時（＝その時）に話し手がいる（いた）位置への移動」、「参照時に聞き手がいる（いた）位置への移動」などを表し得る（たとえば、“John came to the office yesterday morning.”という文は、少なくともこの4つの解釈に曖昧となる）。この点を踏まえると、“May we come in?”では、話し手が移動する主体であり、また、参照時（特定の未来時）への言及がない点などから、通例、ここでの *come* は、「発話時に聞き手がいる位置への移動」を表すと解釈される。

この *come* の解釈は、さらに、“May we come in?”の *we* が、「聞き手除外的」(exclusive) 用法に解釈されることにつながる。この場合、“May we come in?”は、さらに、次の2通りの解釈が可能である。第1に、聞き手（たとえば、建物の中にいる守衛）に「私達、入っても構いませんか?」と入講の許可を求めている解釈がある。第2に、聞き手（たとえば、たまたま建物の中にいた人）に「私達は入っても構わないのでしょうか?」と入講の可能性を尋ねている解釈である。どちらの場合も、聞き手は構内（建物の中）にいる。

興味深いことに、*come* を *go* に変えた“May we go in?”では、少なくとも次の3通りの解釈が可能となる。第1に、聞き手（たとえば、建物の外にいる守衛）に「私達、入っても構いませんか?」と入講の許可を求めている解釈がある。この場合の *we* は、「聞き手除外的」用法に解釈される。第2に、聞き手（たとえば、建物の外でたまたま居合わせた人）に「私達は入っても構わないのでしょうか?」と入講の可能性を尋ねている

解釈がある。この場合の *we* も、「聞き手除外的」用法に解釈される。第 3 に、聞き手（話し手の同伴者）と建物の外で「私達は入っても構わないだろうか？」と入講の可能性を確認し合っている解釈がある。この場合の *we* は、「聞き手包含的」(inclusive) 用法に解釈される。

では、“*May we come in?*” という許可求めの発話に対する許諾の返答発話としては、どのような発話が考えられるであろうか。“*Okay.*” や “*Yes, you may.*” などといった返答が思い浮かぶかもしれないが、Fillmore によれば、これらの返答発話では、“*I hereby grant you the permission that you requested*” といった許可を与える権限者としての権力的な立場が反映されてしまうことから、会話においてポライトネスが期待されるコミュニティの中ではやや失礼な発話に響くという。より丁寧な返答発話は、むしろ、“*Yes, please do.*” や “*Come in, by all means.*” といった命令文の発話であるという点は興味深い。

Fillmore の研究の真骨頂は、一つ一つの用例に対する鋭敏で微細な意味解釈にある。Fillmore の透徹した意味解釈は、三十一文字の短詩形の和歌に対する精緻な解釈にも似た深遠さを感じさせる。

Fillmore の興味深い論文の一つに、“*“Corpus linguistics” or “Computer-aided armchair linguistics”*” と題する論文 (Jan Svartvik (ed.) *Directions in Corpus Linguistics*, Mouton de Gruyter, 1992 年) がある。この論文の末尾は、「母語話者としての分析者の内省と苦悩なしに言語分析ができるようなことにでもなれば、私はそうした言語学の企てには興味を持ってないだろう」という印象的な一文で締められている。Fillmore が晩年まで主導したフレームネットにおいても、母語話者の内省に裏づけられた意味分析が生かされている。Fillmore が生涯をかけて取り組んだ精緻な意味分析は、「母語話者が持つ言語知識とはどのようなものであり、この言語知識の総体はどのように記述されるべきであるか？」という深遠な問いに迫るための最も基本的な研究姿勢であったと言える。



## 日本言語学会（1988～2018）略年譜

### 1988 年度

1988－1990 年度の役員選挙の結果、小泉保氏が会長に選出された。事務局長は近藤達夫氏、編集委員長は下宮忠雄氏。

日本言語学会設立 50 周年記念大会（第 97 回大会）が 10 月 22 日（土）・23 日（日）の両日、神戸市外国語大学で開催された。初日の 10 月 22 日（土）に日本言語学会設立 50 周年記念式典がとりおこなわれ、小泉保会長挨拶、歴代会長祝辞、平山輝男日本音声学会会長、築島裕国語学会代表理事、長谷川欣佑日本英語学会会長、外国の言語学者からの祝辞のあと、服部四郎氏による「言語の構造と体系」という記念講演が行われた。引き続いて、「中央アジアの文献言語と言語接触」というリレー講演が西義郎氏の司会のもとで武内紹人氏、吉田豊氏、庄垣内正弘氏、樋口康一氏によって行われた。

### 1990 年度

第 100 回記念大会が 6 月 2 日（土）・3 日（日）の両日、東京大学本郷キャンパスで開催された。初日の 6 月 2 日（土）に第 100 回大会記念フォーラムとしてピジン・クレオールをめぐる連続リレー講演が行われ、土田滋氏、西光義弘氏、崎山理氏、細川弘明氏、西江雅之氏が登壇した。また第 100 回大会記念の小冊子『日本言語学会大会 100 回の歩み』が大会に先だち、配布された。

### 1991 年度

1991－1993 年度の役員選挙の結果、松本克己氏が会長に選出された。事務局長は角田太作氏、編集委員長は柴谷方良氏。

学会事務センターへの委託費の値上がりなどにもない、この年度から会費が通常会員 6,000 円から 7,000 円に、維持会員 8,000 円から 10,000 円に変更された。

### 1992 年度

『言語研究』の編集について、投稿規程・執筆要項の整備がなされた。またこの年度から、完全査読制度が導入された。また掲載論文にキーワードが付けられるようになった。

た。

SOAS が廃止されるという報告を受け、日本言語学会として公式に抗議文を送った。後日、SOAS から Department of Phonetics and Linguistics は存続する旨の回答があった。ケベックで開催された第 15 回国際言語学者会議に日本代表として柴田武氏を派遣した。

#### 1993 年度

この年度末をもって、事務局を三省堂から移転することになり、「事務局対策委員会」が設置され、事務局を含めた学会の運営体制について早急に対策を講じることになった。検討の結果、1994 年 4 月から京都の中西印刷に事務を委託することに決定した。中西印刷では、これまで三省堂の事務局で行ってきた業務に加えて、学会事務センターに委託してきたすべての業務を行うことになった。なお事務局移転に際しては、学会の財政難を招くおそれがあるため、学会役員から 1 口 1 万円の寄付を募ることになった。

松本克己会長から、危機に瀕した言語の情報データセンターを東京大学に設置してほしい旨、東京大学総長宛に依頼状が出され、言語学会としてもこの問題に積極的に取り組むための検討委員会を設置することになった。

#### 1994 年度

1994－1997 年度の役員選挙の結果、梅田博之氏が会長に選出された。事務局長は坂本比奈子氏、編集委員長は宮岡伯人氏。

危機言語小委員会が設置され、土田滋氏を委員長とした。

#### 1995 年度

この年の秋の第 111 回大会に大会予稿集が試行的に発行された。

#### 1996 年度

カリフォルニア大学サンタバーバラの Charles N. Li 教授より、2001 年同大学開催予定の Pacific Rim Linguistics Institute というアメリカ言語学会夏期講座を日本・韓国・台湾・豪州・米国の言語学会との共催にしてもらいたいという要望があり、同意するとの回答を行った。

大会予稿集については、今後も継続することになった。

## 1997 年度

1997－1999 年度の役員選挙の結果、柴谷方良氏が会長に選出された。事務局長は窪菌晴夫氏、編集委員長は庄垣内正弘氏。

学会内外の諸問題を検討するために、今期の常任委員会内に 3 つの作業部会が設けられた（大会関係部会、国際関係部会、夏期講習会部会）。

パリで開催された第 16 回国際言語学者会議に日本代表として下宮忠雄氏を派遣した。

## 1998 年度

日本英語学会と共同作成した『学術用語集 言語学編』日本学術振興会より出版された。

夏期講座検討小委員会（西光義弘委員長）による検討をふまえて、1999 年度に第 1 回日本言語学会夏期講座を開催することになった。

10 月 3 日（土）、4 日（日）の両日、清泉女子大学にて「危機に瀕した言語」と題するシンポジウムが日本言語学会後援というかたちで開催された。

## 1999 年度

8 月 23 日（月）～8 月 28 日（土）に、関西地区大学セミナーハウスを会場に第 1 回日本言語学会夏期講座を開催した（西光義弘実行委員長）。

11 月 26 日（金）に、国立民族学博物館において「言語・文化における権利」と題するシンポジウムが国立民族学博物館と共催のかたちで開催された。

大会運営委員会検討小委員会（吉田和彦委員長）の検討結果を受けて、研究発表応募論文の急増、大会プログラムの充実と活性化、編集委員会との連携などの問題に対応するために、常任委員会から独立した組織として「大会運営委員会」を設置し、大会の企画・運営にあたることになった。

「投稿規程」・「研究発表に関する規程」の英語版が作成された。

## 2000 年度

2000－2002 年度の役員選挙の結果、早田輝洋氏が会長に選出された。事務局長は梶茂樹氏、編集委員長は田窪行則氏。

この年度から大会運営委員会が活動を開始した（吉田和彦委員長）。

10 月 21 日に日本言語学会と東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門との共催による「消滅の危機に瀕した言語と言語学者の役割」と題するシンポジウムが東京大学で開催された。

第 121 回大会の 2 日目、11 月 26 日（日）に「日本語の系統：回顧と展望」と題する公開シンポジウムが開催された。

この年度から日本言語学会ホームページが公開されるようになった。

#### 2001 年度

編集委員会に海外特別編集委員を加えることになった。

6 月 25 日～8 月 3 日開催の LSA の Pacific Lim Institute に日本言語学会会員を講師として派遣するとともに、日本言語学会会員資格を持ち参加する学生 12 名に奨学金を支給した。

8 月 21 日（月）～8 月 26 日（土）に、大学セミナーハウス（東京都八王子市）を会場に第 2 回日本言語学会夏期講座を開催した（荻野綱男実行委員長）。

#### 2002 年度

若手研究者を積極的に育て、支援することを目的として、この年度より学生会員というカテゴリーを設けることになった。年会費は 4,000 円（在外会員は 5,500 円）で、選挙権、被選挙権は有しない。

8 月 19 日（月）～8 月 24 日（土）に、白樺湖畔水源層で第 3 回日本言語学会夏期講座を開催した（三原健一実行委員長）。

文部科学省特定領域研究（A）『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする研究調査研究』による国際学術講演会が 11 月 23 日～25 日に京都国際会館にて、日本言語学会の後援のかたちで開催された。

日本言語学会ホームページの運営を担当してきた作業部会が小委員会に格上げされた（松村一登委員長）。

#### 2003 年度

2003－2005 年度の役員選挙の結果、庄垣内正弘氏が会長に選出された。事務局長は佐藤昭裕氏、編集委員長は吉田和彦氏。

プラハで開催された第 17 回国際言語学者会議に日本代表として長嶋善郎氏を派遣する予定であったが、諸事情により参加が不可能になったため、『言語研究』掲載の同会議報告の執筆を前回の日本代表であった下宮忠雄氏が行った。

従来の夏期講座検討小委員会は、検討の段階は終わったために夏期講座委員会に格上げされた。

都立四大学の統廃合問題と人文学軽視についての要望書が学術会議宛に会長名で出さ

れた。

1月23日（金）に『危機言語』の国際社会的状況一言語維持のための戦略」と題する危機言語に関するシンポジウムが学士会館で行われた。

#### 2004年度

8月24日（火）～8月29日（日）に、大学コンソーシアム京都で第4回日本言語学会夏期講座を開催した（荻野綱男委員長）。

#### 2005年度

この年度より広報委員会検討ワーキンググループが広報委員会として発足した（上山あゆみ委員長）。広報委員会は、ホームページを中心とする広報活動と大会ポスター、プログラム等の広報活動からなる学会の広報活動全般を包括的に扱う。

2月11日（土）に「フィールドワークの光と影—今なぜ、危機言語に挑むのか？—」と題する危機言語に関するシンポジウムが学士会館で行われた。

個人情報保護法施行に関わる言語学会の対応として、「日本言語学会個人情報取扱規程」、「日本言語学会における個人情報の取扱方針について」、「個人情報保護に関する遵守事項確認書」が制定された。

#### 2006年度

2006—2008年度の役員選挙の結果、上野善道氏が会長に選出された。事務局長は林徹氏、編集委員長は影山太郎氏。

8月21日（月）～8月26日（土）に、東京大学駒場キャンパスで第5回日本言語学会夏期講座を開催した（荻野綱男委員長）。

「日本言語学会著作物取り扱い規程」が制定された。

『言語研究』に掲載されている「論文」、「フォーラム」、「書評論文」、「書評・紹介」について、(独) 科学技術振興機構 (JST) の J-STAGE においてアーカイブ化されることになった。

#### 2007年度

ホームページにおいて過去の大会の研究発表要旨が閲覧できるようになった。

この年度の9月に刊行された『言語研究』132号から表紙のデザインが変更された。

『言語研究』132号からの偶数号で、特定のテーマに関する特集が組まれることになった。

## 2008 年度

ホームページ上で、過去の様々な情報（大会プログラム、大会開催校、最近の『言語研究』の論文要旨、歴代の役員氏名等）が公開されるようになった。

この年度から大会会場に保育室を設けて、子育て中の会員を支援するようになった。

8月19日（火）～8月24日（日）に、京都大学で第6回日本言語学会夏期講座を開催した（三原健一委員長）。

第18回国際言語学者会議が7月21日から26日まで韓国ソウルで開催された。この会議の報告については、『言語研究』137号において長嶋善郎氏によってなされている。

3月14日（土）に「日本のなかの危機言語—アイヌ語，琉球語，本土方言—」と題する危機言語に関するシンポジウムが東京大学で行われた。

## 2009 年度

2009—2011年度の役員選挙の結果、影山太郎氏が会長に選出された。事務局長は井上優氏、編集委員長は窪菌晴夫氏。

この年度より、従来の各地区選出の「委員」は「評議員」と名称が改められた。

電子ジャーナル化ワーキンググループの検討結果を受け、刊行後1年を経た『言語研究』掲載論文の学会ホームページでの一般公開（無償）が行われることになった。

言語学普及検討小委員会（久保智之委員長）の答申を受け、危機言語小委員会を解散し、「言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクト制度」が新設されるようになった。

## 2010 年度

4月に日本言語学会、日本語学会、日本英語学会、日本語教育学会、全国語学教育学会の5学会を幹事学会とする言語系学会連合が発足し、この年度は日本言語学会が運営委員長と事務局を担当することになった。この連合の目的は言語系学会の連携と情報交換、シンポジウム等の取組の共同実施などである。

8月23日（月）～8月28日（土）に、北海道大学で日本言語学会夏期講座2010を開催した（加藤重広実行委員長）。

言語系学会連合と日本学術会議の共催による公開シンポジウム「日本語の将来」が9月19日に日本学術会議で開催された。

秋に開催された141回大会から、研究発表のWebページからの応募受付を開始した。

## 2011 年度

2011年3月に起きた東日本大震災の被災会員に対して会費免除の措置が開始された。

この年度より、「日本言語学会論文賞」と「日本言語学会大会発表賞」の2つの学会賞が設置された。

## 2012 年度

2012-2014 年度の役員選挙の結果、梶茂樹氏が会長に選出された。事務局長は吉田和彦氏、編集委員長は林徹氏。

春の第 144 回大会から、会員からの要望があれば手話通訳者を会場に手配するようになった。

8 月 20 日（月）～8 月 25 日（土）に、東京大学本郷キャンパスで日本言語学会夏期講座 2012 を開催した（西村義樹実行委員長）。

## 2013 年度

科学研究費研究成果公開促進費について、従来は学会誌の刊行助成に対して公布されていたが、この年度からは国際情報発信強化に対して公布されるようになった。言語学会が申請した「国際学術ネットワークと電子的情報発信の強化のための組織的取組」という課題に対して、2013 年度は 3,400,000 円が公布された。

ジュネーブで開催された第 19 回国際言語学者会議に日本代表として田窪行則氏を派遣した。

秋の第 147 回大会から、会員からの要望があればノートテイカーを会場に手配するようになった。

第 147 回大会における 1 件の研究発表について、調査委員会を設置して調査を行った結果、剽窃による発表であることが判明した。これを受けて、当該研究発表に関する情報を学会ホームページから削除するとともに、研究倫理を十分に自覚して研究を誠実に遂行するように会員各位に注意喚起がなされた。

学会に関連する法人税と源泉徴収の対象となる学会事業の問題について、日本言語学会は 12 月 10 日に税理士と業務契約を締結し、2014 年度より法人税の納付と源泉徴収業務を開始することになった。

## 2014 年度

8 月から e-naf（オンライン会員情報管理システム）が導入された。

8 月 18 日（月）～8 月 23 日（土）に、名古屋大学で日本言語学会夏期講座 2014 を開催した（佐久間淳一実行委員長）。

## 2015 年度

2015－2017 年度の役員選挙の結果、窪菌晴夫氏が会長に選出された。事務局長は野田尚史氏、編集委員長は金水敏氏。

春の第 150 回大会において、「日本言語学会の回顧と展望」と題する 150 回大会記念フォーラムが開催された。その内容は、第 150 回大会記念フォーラム「日本言語学会の回顧と展望」として、学会 Web ページに公開されている。

この年度から、学会メールマガジンの運用を開始し、最新の学会情報を定期的に会員に向けて配信されるようになった。

e-naf（オンライン会員情報管理システム）に会員名簿相互検索機能が加えられたことにより、これまでの紙媒体の会員名簿を廃止することになった。

春に刊行された『言語研究』149 号より、学会ホームページにおいて刊行後即時、掲載論文がオンラインで公開されるようになった。

## 2016 年度

論文賞選考小委員会と大会発表賞選考小委員会を解散し、学会賞選考委員会を新たに設置し、今後この委員会において論文賞と大会発表賞の選考を行うことになった。

『言語研究』に掲載される彙報が、個人情報などを消去したうえで学会ホームページにおいて公開されるようになった。

2016 年 4 月に起きた熊本大震災の被災会員に対して会費免除の措置が開始された。

8 月 23 日（火）～8 月 28 日（日）に、大阪大学で日本言語学会夏期講座 2016 を開催した（宮本陽一実行委員長）。

秋の第 153 回大会から、紙媒体の大会予稿集を廃止し、電子媒体（PDF）化して、大会前に学会ホームページで公開されることになった。

## 2017 年度

『言語研究』への投稿について、J-STAGE 提供の投稿・審査システム (Editorial Manager) の運用を開始した。

2018－2020 年度の役員選挙において、従来の紙媒体による投票ではなく、オンライン選挙を実施した。選挙の結果、田窪行則氏が会長に選出された。事務局長は有田節子氏、編集委員長は井上優氏。

## 2018 年度

春の第 156 回大会において、「日本のヴォイス研究の 80 年：成果と展望」と題する 80



周年記念シンポジウムが行われた。

8月20日（月）～8月25日（土）に、東京外国語大学で日本言語学会夏期講座2018を開催した（渡辺己実行委員長）。夏期講座期間中、上野善道氏による「服部四郎と日本祖語」という講演が、80周年記念特別講演会として行われた。

6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、9月の北海道胆振東部地震の被災会員に対して会費免除の措置が開始された。